その1 金目川と観音堂

観音様の伝説を追え

○広報編集長「君たちは金目観音を訪ねて『観音様の伝説』を解き明かしてきなさい」
○子ども記者「伝説って、何だかおもしろそう！」

わたしたち二人は「観音様の伝説」を解き明かすため、南金目にある金目観音にやってきました。すぐ前を金目川が流れていて、のどかなところです。

門をくぐって境内に入るとき、だれかの視線を感じたような気が…。見上げると薄暗い門の中から大きな仁王様がわたしたちを見下ろしていました。

正面にある観音堂には、たくさんの赤いのぼりが立っていて、「金目山光明寺」と書かれた看板が掛かっています。

「観音様の伝説ってどこに隠されているんだろう？」

「観音堂の中かな？　でも勝手に入ったらしかられそうだし…」

どうしていいのか分からないでいると…。

「君たち、何か用かい？」

住職さんが現れました。

「わたしたち、観音様の伝説を追っているんです」

「そうか、そうか」

住職さんは、わたしたちに観音様の話をしてくれました。

――むかしむかし、大磯の小磯海岸でのこと。魚をとっていた漁師の網に小さな木像がかかりました。引き上げてみると、それはなんと観音様でした。

漁師は観音様を家に持ち帰り、大事にまつっていました。するとある晩、夢の中に観音様が現れ、「かないにまつれ～」と言いました――。

昔は金目のことを「かない」といったそうです。それで観音様は金目にまつられたんですね。

「観音様はいまどこにいるんですか？」

住職さんは、わたしたちを観音堂に案内してくれました。

「観音様はこの『お厨子さん』の中にいるんだよ」

厨子とは、仏像などを中に安置するもののことだそうです。金目観音の厨子はとっても価値があるもので、国の重要文化財に指定されているそうです。

「観音様を見せてもらえますか」

「今日は見せてあげることができないんだよ」

この厨子の扉が開かれるのは、60年に一度！　次に観音様が見られるのは2034年だそうです。そのときになったら、観音様に会いに来よう！

暗やみから仁王様が登場！

「これがその観音様？」「いや、この奥の厨子の中にいるんだよ」

金目観音（南金目 896）
バス　平塚駅北口から、秦野駅行き・東海大学行きなどで「金目駅」下車徒歩3分、大人片道340円

その2 七国峠・遠藤原

土屋に伝わる供養松の伝説を追え

七国峠へ出発だ！

○広報編集長「君たちは、土屋に伝わる〝松〟の伝説を調べなさい」
○子ども記者「伝説って何？どんな松なんだろう」

伝説を調べるため、わたしたちはまず七国峠に近いびわ青少年の家に行ってみました。管理人さんに話を聞くと、この施設は青少年がキャンプなどをする場所なのですが、土屋周辺をハイキングする人たちが休憩したり、お弁当を食べたりする場所としても利用させてもらっているそうです。

「土屋に伝わる〝松〟の伝説って知りませんか」

「昔話で七国峠の供養松っていう話を聞いたことはあるよ」

その話を管理人さんに話してもらいました。

昔、鎌倉幕府を開いた源頼朝が挙兵したとき、この地を治めていた領主の土屋三郎宗遠が一族を率いて参戦。けれども石橋山の戦いで息子を亡くしてしまい、その供養のために七国峠に松を植えた。その松は「七国峠の供養松」といって、村人たちや通行する人びとに親しまれ、峠を越える人が、その場所で必ず休んだのだそうです――。

「そんな伝説があったんだ！」

「その松を探しに七国峠に行ってみようよ」

七国峠へやってきました。

案内板には供養松の伝説が…

「ここが七国峠、遠くまで見えるね」

「案内板があるよ、見てみよう」

案内板には〝七国峠は平塚市の最西端にあり、標高182メートル、甲斐の国（今の山梨県）、駿河の国（今の静岡県）など七つの国が見えたことから名づけられた〟とあり、供養松の伝説についても書いてありました。

ふと横を見ると、松の木が。そして、〝供養松〟と書かれた札が立っていました。

この松は小さいし、伝説にちなんで後から植えられたのかもしれません。峠を越える人が休んでいた昔がどんな雰囲気だったのか、ちょっと知りたくなりました。

七国峠（土屋）
バス　「井ノ口経由秦野駅南口」行き、「中沢橋経由秦野駅南口」行き「七国峠」下車徒歩10分、大人片道460円

寄り道レポート　銭洗い弁天

弁天さんのご利益があるかな？

平塚市のハイキングコースとして紹介されている「土屋の古跡をめぐるみち」の途中には、「土屋の弁天さん」として親しまれている妙円寺があります。

ここは銭洗い弁天といって、洞くつの中の池でお金を洗うとお金持ちになれるそうです。もちろんわたしたちも洗ってみました。お金持ちになれるかな？